



i n t e r v i e w

マイクロソフトコーポレーション 会長兼CEO

B i l l G a t e s

ビル・ゲイツ

私たちのビジョンは「コンピュータをあらゆる家庭 あらゆるデスクトップに置く」ということです

1996年12月、マイクロソフトウィンドウズNT 4.0の日本での発売開始に合わせて、同社社長兼CEOであるビル・ゲイツ氏が来日した。10日に行われた「ウィンドウズNTインターネットソリューション」での基調講演では6000人以上の聴講者を集め、日本での注目度の高さをあらためて証明した。パーソナルコンピュータの世界でメインプレイヤーでありつづけるビル・ゲイツ氏に1997年の展望を聞いた。

1996年12月13日の記者懇談会より：インターネットマガジン編集部
photo:picatti dandolini

☎：1995年はウィンドウズ95、96年はインターネットと、毎年大きなキーワードを投げかけてきたマイクロソフト社の97年のキーワードは何でしょうか。

ビル：もちろん「インターネットエクスプローラ」はお気に入りのキーワードです。もう一つ、「マイクロソフトエクステンジ」が大きな役割を果たすでしょう。私たちが特に強調しているのは「誰もが電子メールを使うようになる」、しかも1日に数回使うようになるということです。特に、企業は根本的なコミュニケーションの手段を電子メールに転換しなくてはならないと思います。そうでなければこれからの情報化時代に参加するのは難しいと言えるでしょう。こういった意味で、エクステンジの需要は非常に高いはずですが。

さらに「ウィンドウズNT」の勢いは大変なものになるでしょう。もちろん私たちはウィンドウズNTに対して多くの期待を寄せていましたが、現時点でこれをはるかに上回る実績を上げています。特に世界の中でも日本は、最も成功した国となりました。驚くべき速さでウィンドウズNTが普及しています。

また、ほかにも97年中に期待できることとして、ウィンドウズNT5.0とウィンドウズ95の新しいバージョンのリリースがあります。97年も皆さんに多くの話題を提供することができるでしょう。

☎：マイクロソフト社は数多くの製品や戦略を発表していますが、どのようなビジョンのもとにこれらを進めていくつもりですか。

ビル：マイクロソフト社には現在2万人以上の従業員がいます。つまり、並行して幅広くいろいろな事業ができる企業なのです。しかし、私たちのビジョンは極めてシンプルです。すなわち、最高の情報ツールとなるような素晴らしいソフトウェアを提供することです。そしてこれが学校や家庭、さらにビジネスの場で、わくわくするようなパワーを発揮すればよいと願っています。

具体的には、マイクロソフトオフィスはビジネスの場において生産性を上げるのに役立つでしょう。ウィンドウズOSやサーバー用のソフトウェアも同様です。また、一般のユーザー向けには双方向性を持ったメディアを提供しています。これらの分野でマイクロソフト社はエンジニアティブを取ってきました。しかし、突き詰めていくと私たちのテーマは「Information at your fingertips」、*“情報を指先に”*ということになるのです。

コンピュータは人間と自然に対話できるようになります。

☎：「マイクロソフトリサーチ」で研究されているコンピュータの「自然言語」や「音声認識」によって、パーソナルコンピュータがどう変わると思いますか。

ビル：間違いなく半導体のマジックによって、コンピュータの処理速度や処理できる情報量は増加しています。そして今後もこういった状況は急速に進むはずですが、おかげで私たちはいろいろな難しい課題に取り組めるようになりました。近い将来に、コ

ンピュータがものを聞いたり読み取ったり、さらには学習したりという能力を持つようになるはずですが、マイクロソフト社では、知覚認識や言語学の専門家といった最高の研究者を集めた「マイクロソフトリサーチ」でこの分野の研究を進めています。

さて、さまざまな問題乗り越えてパーソナルコンピュータが知覚認識の能力を持ったとき、大きく変わるはその外観です。パーソナルコンピュータは、人間と自然に対話できるような姿になるのです。

これが具体的にいつ実現されるかを予測するのは簡単ではありません。過去においても、「グラフィカルインターフェイス」がいつ実現するかを予測できなかったのと同じです。しかし、私たちはこの問題に対しても、しっかりと「公約」を掲げて取り組んできました。そして必ず「ターゲット」が達成できるという自信のもとで進歩を成し遂げてきたのです。

☎：マイクロソフト社が発表した「NetPC」の利点とは何ですか。

ビル：NetPCの利点とは、コンピュータの本体に対して何らかの変更を加えなくてはならないとか、そのためにマシンそのものを開けなくてはならないといった状況からユーザーを解放できることです。これを実現すると同時に、1社の独占ではなく、ハードウェアにおいて依然として激しい競争が展開されるような環境を維持します。さらに、ユーザーインターフェイスやアプリケーションに関しては、現在のパーソナルコンピュータとの互換性を保つというのがねらいです。そして、この構想には多くのPCメーカーが参加しているために、ここでパーソナルコンピュータの新しいバリエーションができるはずですが。

NetPCはその構成要素がハードウェアとソフトウェアとはっきりと分離していません。このためUNIXの世界で見られるような、あるソフトウェアはこのハードウェアで



しか動作しないといった互換性のないものではありません。

☞：それではこの「NetPC」はほかのネットワークコンピュータ（NC）とは競合するものですか。それとも共存するものですか。

ビル：すべては1つの世界ですから「共存」しているのです。ここでは「共存」するが「競合」するかという選択ではないと思います。

NCの立場というのは、現在PCで使われているハードウェアやアプリケーションを捨てるべきであるというものです。そして、パーソナルコンピュータによって実現された「人に対して権限を与える」という状況が悪いものであるという立場です。このために、マイクロソフト社はNCの動きに関与していません。

私たちはNetPCを通じて、いかにシンプル化をはかり、そして集中化された状態というものを現実するかという課題に取り組んでいます。しかし、これは決して現在のハードウェアやアプリケーションを放棄するものではありません。現在あるパーソナルコンピュータの柔軟性を維持しながら進めていくものです。

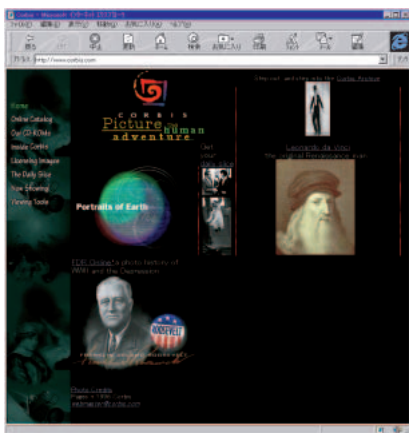
☞：本や映像などのデジタル化が進んでいますが、ゲイツ会長が始めた「コルビス社」でも、多くのコンテンツのデジタル化の権利を取得されているようです。このねらいはなんですか。

ビル：実際に「デジタルイメージライブラリー」を手がけているのは、マイクロソフト社ではなく、私が始めた「コルビス社」というところです。

ここでの主要な業務は、デジタル化の権利を買うというよりは、むしろコンテンツを作成することです。そして、しっかりとした契約のもとでさまざまな映像やイメージといったものを提供するとともに、その利用に当たっては、作品の著作権を持っているアーティストに対して正当なロイヤルティーを支払うということを担当しています。コルビス社は、単に高解像度のイメー

【NetPC】

パーソナルコンピュータの拡張性を必要としない、ある一定の目的（仕事）のためにPCを使用するユーザーをターゲットにしたシステム。最低限のCPUとメモリーによってPCの管理コストを削減できる。また、「密封されたケース」によって、ユーザーはPCの中身に触れることから解放される。マイクロソフト社とインテル社によって1996年10月にその構想が発表された。



デジタルコンテンツの宝庫、コルビス社のホームページ

URL <http://www.corbis.com>

ジのスクリーンショットを撮っているわけではなく、作品そのものの作成を手がけているのです。

そして私たちの目的は、本の出版社や新聞社、あるいは一般のユーザーがイメージが必要な場合に、インターネットのサイトにアクセスすることで簡単にこれを見たり、入手できるようにするという事です。今後さまざまなアプリケーションの画像の表示能力が上がることによって、またインターネットの回線状況が改善されることによって、コルピス社は大きな可能性を持つてくると思います。

デジタルの世界はクリエイターに大きなチャンスを与えるはずで

☞：情報がデジタル化されることの利点はなんでしょうか。

ビル：デジタル空間では情報の伝達が簡単になります。この世界では、物を書いたりイメージを創造したりするクリエイターが自分の作品を配信しやすいのです。さらに最近の優れた技術によって、その利用状況を追跡することが可能になりました。これによって、著作権に対して非常に細かい額まで支払われるようになるでしょう。コピーライトの状況が、デジタル以外の世界と同様に展開されるわけです。

こうして、いろいろな報酬を受ける機会が増えていけば、デジタルの世界がクリエイターに大きなチャンスを与えるのではないかと思います。

☞：マイクロソフト社がインターネットの標準化に貢献するというお話がありましたが、具体的にどのように貢献するのでしょうか。

ビル：まず、セキュリティとかオーディオやビデオのための標準化がありますが、このほかにもサービスの質を向上させるための標準化としていろいろなものが挙げられます。

インターネットにおいてどのようにバンド幅を予約することができるかという問題があります。また、ユーザーに対してカスタ

マイズ可能なサービスを提供するためには、「ユーザープロフィール」というものを作成する必要があります。

「リンク」の機能も今以上に強化したいと思います。例えば、あるWeb ページをダウンロードする際にはどういったファイルと一緒にダウンロードされるべきかということと理解する仕組みや、カレンダーに自動的にスケジュールを記入するような仕組みを作るということです。そしてWeb ページに、ただ単に読むだけの目的以上のさまざまな機能を付加したいと考えています。

こうした標準化の動きの中で私たちと一緒に努力を進める企業として、「シスコ社」や「インテル社」があります。またITU といった国際機関もこれに含まれるでしょう。私たちの目的は、標準化を通じてインターネットをさらに拡大するために貢献することなの

☞：97年に登場することになるウィンドウズ95の後継バージョンについて教えてください。

ビル：このバージョンでは、インターネットの機能が非常にタイトな状態で統合されます。メールクライアントや、インターネットにおいてコラボレーションを実現するための「ネットミーティング」が含まれます。そして、ウィンドウズのシェルとWWW ブラウザーとが統合されます。これらはすべて「インターネットを簡単に活用できるように」というねらいのもとで開発が進められています。またデスクトップにおいても、ただ単にフォルダーの名前を表示するだけでなく、「ティッカー」形式でさまざまな情報を表示することができるようになります。

ハードウェアの対応も、USB や IEEE1394 などの機能が活用できるようになりますから、非常に大きなパフォーマンスの向上が期待できると考えています。そしてこれらの性能を引き出すために、メモリーを増やす必要がまったくないのです。

☞：マイクロソフト社が今後10年間メインプレーヤーでありつづけるためには何が重要だと考えていますか。

ビル：私たちがメインプレーヤーであるかどうかは分かりません。この業界では数多くの企業が活躍していますから。

しかし、なぜマイクロソフト社がソフトウェアの分野においてはリーダーでありつづけてこれたかという鍵は、ユーザーからのフィードバックにあります。ユーザーからの電子メールや電話で、あるいは会議においていただいているいろいろなフィードバックに私たちは耳を傾けているということです。

さらに私たちは、今後パーソナルコンピュータをいかにシンプルにできるかということに、ぎりぎりのところまで挑戦していかなくてはなりません。私たちのもともとのビジョンは、「コンピュータをあらゆる家庭、あらゆるデスクトップに置く」ということです。これが実現するにはあと20年かかるでしょう。しかし、毎年毎年ソフトウェアは進化していますし、必ず実現するはずで

最もエキサイティングなことは教育にコンピュータを使うことです。

☞：ゲイツ会長は次の世代の子供たちにとってどのような環境を残したいと考えていますか。

ビル：最もエキサイティングなことは、教育にパーソナルコンピュータを使うことです。子供たちの好奇心によって物事を追求するうえで、さまざまなツールがこの手助けになります。そしてこの環境を家庭や教室で実現することによって、教育の抜本的な進歩というものを提供でき、子供たちが潜在能力を発揮する新たな機会を作れるのです。教育の場や図書館などの施設において、これらの環境を整えるための巨大な投資を行うべきであると考えています。

そしてこれが実現したときには、「コンピュータを使いこなせる」ということが、ある意味で新しい「識字率」になるかもしれません。

パーソナルコンピュータをいち早く学校に導入し、多くのツールを使えるような教育をすることは、非常にパワーのあるものに発展していくと思います。 ●●



[インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社インプレスR&D

All-in-One INTERNET magazine 編集部

im-info@impress.co.jp